

調査の実施

5

冬の調査

この時期は水中の調査は大変ですが、水生生物の生存に必要な水が田んぼや水路にあるかどうかを調べるには最もよい季節です。雑木林は葉を落としているうえ、ハチ、マムシ、ヤマビルなどの危険な生きものたちがいないので、林に入って調査するにもよい季節です。この季節に行う必要がある調査は、他の季節に比べて少なくてすみますので、春から秋にかけて行った調査の結果をまとめるのもよいでしょう。

雑木林での調査

春から秋の調査で、昔に比べて林が暗くなり、林の中で咲く花が少なくなったとわかったところでは、冬に以下のことが起っていないかを調べてみましょう。

- ・木を伐らなくなった。林の中には立ち枯れの木やつるでおおわれた木が多くなっている。
- ・林の低木層に常緑広葉樹やササが茂っている。
- ・林内にタケが侵入し竹林に変化している。

キツネ

頭胴長60~75cm



里から山地まで広くすみ、ネズミや小鳥、昆虫などを食べる。人家の近くまで姿を見せることがある。

田んぼや水路での調査

春から秋の調査で、昔に比べて水路に魚がいなくなったり、田んぼに鳥も来なくなったとわかったところでは、冬に以下のことが起っていないかを調べてみましょう。

- ・田んぼが乾いている。秋耕しているので稲もみが落ちていない。麦などの冬作をしている。
- ・水路に水がない。3面がコンクリート張りにされているので魚がかくれる場所がない。水路の中や川と水路の間に落差があり、魚がのぼることができない。
- ・水際にショウブ、ヨシ、マコモなどの抽水植物がない。

草地での調査

春から秋の調査で、昔に比べて草地の植物やマツムシが見られなくなったとわかったところでは、冬に以下のことが起っていないかを調べてみましょう。

- ・草刈りが行われなくなって、木が生えている。

マガン

体長65~85cm

冬鳥として日本にやってきて、おもに田んぼでイネの落ち穂を食べる。沼や湿地、干潟などがねぐらとなる。



タゲリ

体長30~32cm

冬鳥として日本にやってくる。飛びながら「ミューミュー」と子ネコのような声で鳴く。



トノサマガエルの冬眠



平野部から低い山地にかけての池や田んぼ付近に生息する。春から秋まで活動し、冬は地中で冬眠する。

目視による調査

雪が降ったら、雪の上に残された足跡や、ふん、毛、つめ跡、死がいなどを目視(必要に応じて双眼鏡を使う)によって確認し、記録しましょう。

おもな用具

双眼鏡、採集カゴ、デジタルカメラ、記録用紙、記録用地図



ため池での調査

タナゴがいないところでは、以下のようなことを調べてみましょう。
冬に調べにくいことは、来年の調査計画に入れましょう。

- ・オオクチバスやブルーギルが生息しているか。オオクチバスやブルーギルは池の魚類相に影響を与えるので、魚類相を調査する。
- ・ハクチョウやカモが飛来するか、池の中で給餌（エサやり）をしているか。過剰な給餌は水を富栄養化させ、水底を貧酸素状態にして、カラスガイ、ドブガイなどを死滅させるので、水質や底泥、水生生物などを調査する。
- ・給餌をすると、オナガガモが増えるほか、水の富栄養化によりワムシなどが増え、プランクトン食のハシビロガモが増えるなど、池のカモ相が変化するので鳥類相も調査する。

カモの仲間 体長35~75cm



主に冬鳥として渡来し、ため池・川・海岸などにすむ。
(写真はカルガモ)

谷津田での調査

春から秋の調査で、昔に比べてアカガエル類やサンショウウオ類がいなくなったところでは、冬に以下のことが起っていないかを調べてみましょう。

- ・田んぼが乾田化され、産卵期（早春）に水がなくなった。

このほかにつぎのような変化が起り、それが原因になっていることも考えられます。

- ・道路建設で林が分断されたり、林床が乾燥し、成体がすめなくなった。
- ・林と田んぼの間の水路が3面コンクリート張りになり、移動ができなくなった。
- ・林と田んぼの間に道路ができ、移動中に車にひかれるようになった。
- ・道路に3面コンクリート張りの側溝がつくられ、落ちた個体が上がれなくなった。

メダカの越冬



冬は水草の間や水中の枯葉の下などで越冬する。

ヒガンバナ 高さ30~70cm



まわりの植物が葉を落としている冬の間、十分な光で光合成をする。